

# 京都産業大学 ことばの科学研究センター 2021年度第6回研究会

2021年12月22日（水）15:00～17:00

第二研究室棟会議室・Teamsによるオンライン開催  
オンラインによる参加の場合のみ [center-lg-studies@cc.kyoto-su.ac.jp](mailto:center-lg-studies@cc.kyoto-su.ac.jp) メールでお伝えください

## 束縛現象に関する言語知識とその習得プロセス —日本語を母語とする初級英語学習者の場合—

鈴木 孝明

ことばの科学研究センター研究センター員・外国語学部教授

第二言語習得における照応を「生得的な言語知識」と「帰納的な学習」という2つの側面から探る。英語における再帰代名詞と代名詞は基本的に相補分布を成す（e.g., Bill<sub>i</sub> hates himself<sub>i/\*j</sub> /him<sub>i\*/j.</sub>）。原理とパラメータのアプローチでは生得的な言語知識（e.g., 束縛原理）と経験の相互作用によりこのような現象に関する言語知識が有効になると仮定されているが、学習者が自ら法則性を見出し、一般化を行う帰納的学習（e.g., プリエンプション）による習得も可能かもしれない。本研究では158名の初級英語学習者を対象に文法性判断課題を行い、単文における1人称の再帰代名詞と代名詞の文法知識を探った。その結果、再帰代名詞よりも代名詞に誤りが多く、特に非文法的に使われた代名詞を誤って文法的だと判断する傾向が高いことがわかった。母語獲得研究で頻繁に観察されるこの誤りは、語用論的な問題（原理 P）だとする提案があるが、1人称の代名詞を使うことでこの要因を排除しようと試みた本研究においても観察されたことから、（少なくとも）本研究の学習者に関しては別の要因がかかわっていると考えられる。詳細な個人データ分析を行うことで、転移の影響を分析し、さらに、束縛原理に従わない短距離代名詞を調査に加えることで、束縛現象の習得プロセスに関する考察を行う。